西山地区

コミュニティ協議会だより

【(西風) 令和５年度 11 月号】

発行：西山地区コミュニティ協議会

会長　中村史傳

令和５年 11 月９日発行

薩摩川内市下甑町瀬々野浦 1194

TEL　09969-5-0122

FAX　09969-5-0355

これからの行事（11 月の行事）

９日	トシドン保存会　手打ｺﾐ　15：00
12 日	大帯姫神社秋季大祭
〃	甑マラソン大会（中甑～鹿島）
14 日	助八古道打合せ
19 日	海岸清掃
20 日	事務局会議
21 日	原子力安全対策会議
22 日	衛自連研修
23 日	第４回合同会議
24 日	48 地区会長会議
26 日	避難道整備（旧波止道）

竜宮文化フェスタ里で開催

10月29日竜宮文化フェスタが、今年は里で開催された。昨年は青瀬開催だった。これから先下甑・上甑交互に開催されるという。

オープニングは上甑から勇壮な「甑大明神太鼓」（写真）。

当地西山からは春日流壽毬会日本舞踊「舵」が舞われた。

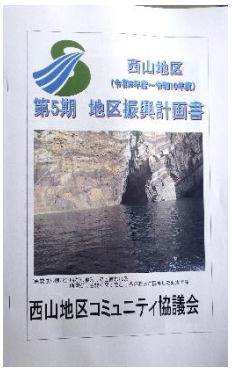
これにさきだちコミュニティではコッパん餅と草ん餅の餅つきをした。芋はこの時期に収穫するには早くてまだ小さかったが、畑の半分くらいを収穫した。芋は千切りにして、天日に３日ほど乾かした。

大きく切ると乾きにくく、小さいと風に飛びやすくなる。

乾いた芋をもち米と一緒に蒸してその後餅つき機でついて形を作る。10月28日について竜宮文化フェスタの会場で売りさばいた。コッパ139個、草餅６個入り89個が発売30分後に完売となった。

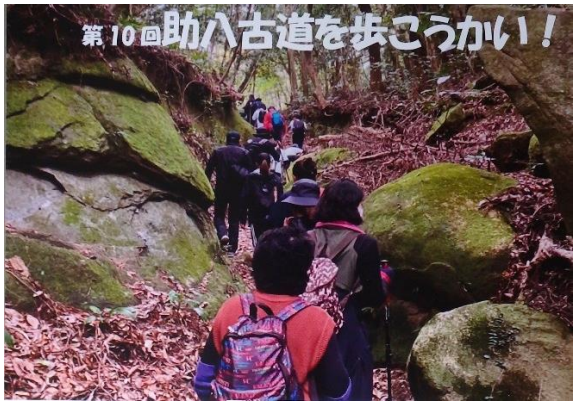
西山地区コミュニティ協議会

第５期地区振興計画書作成作業



表題の作業は２回の策定委員会と事務局会議を経て着々と進んでいます。来年４月の定期総会に提案されます。

基本は第４期をベースにしておりますが、皆さんの中で何か提案があれば次のメンバーにご提案ください。（資料は令和元年定期総会で配布しています）。策定メンバーは　会長　中村史傳、副会長　中村米秀　、委員　中村誠、宮野光祥、中村周二、藤井清美、山下和代、中村了、宮野武矩、山下一也、近藤悠斗、橋本宏樹、書記　宮野安弘です。



助八古道

各家庭に配布されている申込用紙で申し込んでください。

スタッフとしてご協力いただける方は申込んでください。

役割は調理（豚汁）引率のガイド等です。

関西西山郷友会懇親会開催される

体育祭に替わる新たな取り組み

尼崎市において表題の集まり（懇親会）が去る10月8日12時から14時30分まで開催され50人弱の会員並びに関係者の方々が参加されました。

会場は尼崎の出屋敷駅の近く「安心コミュニティプラザ・竹谷連協会館」。

瀬々野浦からも8名が参加し、故郷の近況報告をし、出郷者の安否を確認し、旧交を温めることができました。

集まりはコロナ禍のため4年ぶりとのことでした。尼崎の体育祭に使う会場の制約が強くなり、昼食をはさむ行事に適さなくなったため急遽この行事に切り替える大英断を決議されたようです。時代を反映し連絡網もラインを使ったシステムを使っているようです。大正6年に発足した会は平成29年100周年記念の日を迎え、本年満106年となりました。甑島の他地区は解散している中、同郷の絆を大切にして奮闘している会にエールを送ります。

一方、故郷瀬々野浦も人口70人程度になり集落内の維持管理にぎりぎりのところにきていますが、昔ながらの行事は続けています。運動会は外部の方々の協力も頂いて、地区民だけで運営する小さな運動会開いています。ぜひ出郷者の皆さまも、故郷の運動会機会に合わせて帰省して参加してください。

かって関西西山郷友会発足以来故郷瀬々野浦の教育環境を案じ、豊かでもない生活の中から西山中学校に、下甑で最初になるピアノを寄贈されたり、西山小学校にも書籍、体育用具等教材を送り続けてこられました。この恩恵を受けた世代にとっては頼りとなる組織でした。また関西西山郷友会は故郷と関西地方のみならず全国にいる出郷者を繋いでくれる大切な組織で、かけがえのない組織です。

海岸で芋煮会

10月22日瀬々野浦海岸にテントを設営し本場山形から取り寄せた食材で芋煮会が催されました。青瀬、手打、長浜からも参加され、楽しい会となりました。発案者は浦島のおかみさんで、以前も旧西山小学校を使った「外ヨガ」を企画し周辺の方々を集めた催しをされました。今はヨガの先生が子育て奮闘中でお休み期間となっております。

再開のおりはどうぞよろしく

シリーズ8

故郷を深く浅く探る

「ズーセン」という言葉をおぼえていましたか？　小さな三枚伝馬（サンメーデンマ）で「櫓（ろ）こぎ」をおぼえた頃、こぎくらべの競争を「ズーセン」と言っていた。

このズーセンの意味の由来が分からなかった。ある時、中国映画を見ている時に川を（竜を船首につけた）船がさかのぼっていく。土手から見ると竜が首を上下させて動いていくように見えた。

この場面でズーセンの意味が氷解した。「竜船（りゅうせん）」がシンヌーラ流に訛って「ズーセン」となったのではと思い至った。今日では「ドラゴン・ボート」と称する船漕ぎ競技が各地でおこなわれているから、竜（龍）船＝ズーセンは確信できる。

長崎の「ペーロン」、沖縄の「ハーリー」・奄美の「ハレ」漕（こ）ぎも「飛龍（フェイロン）」や「爬龍（ハリ）」が語源でいずれも中国から長崎や沖縄に伝わったといわれる。

中国南部で船を竜に見たてる風習が東シナ海を通して伝わった。

単なるシンヌーラ方言としてとらえていた「ズーセン」が環東シナ海文化の「竜船」とつながる国際性をもつ言葉でもある。

（中村史傳）